岳人 2013 No.791

PROFILE OF ALPINE CLIMBING file.63

アルパインクライミングのプロファイル

キャシャール南ピラー ニマのライン

クーンブ・ヒマールのキャシャールはかつてピーク43と呼ばれた。
南面に大岩壁をもつ威容を誇るが2000年まで解禁されず、
その3年後に西稜から登頂されただけだった。
未踏の南壁を一撃で陥れた昨年秋の記録。

文●花谷泰広　写真●花谷泰広、馬目弘仁、青木達哉
構成●池田常道

「そっから先に進めそう?」

キャシャールに取り付いて5日目の朝。たっぷり時間をかけて最初のピッチをリードし終えたぼくに馬目が聞いてきた。その声の調子で、つまりは何が言いたいのかは察しがついた。

ここまでの1ピッチでさえたっぷり時間がかかった。ヒマラヤ襞をいくつも越え、シュガースノーの急な雪壁をだましだまし越えてきた。アンカーを作るのにも相当時間がかかった。そしてその先もまだまだ続きそうな雪の世界。引き返すなら、ここが最後だ。トップで登っていたぼくは、ややオーバーヒートしていた頭を冷やしてその先を見つめた。

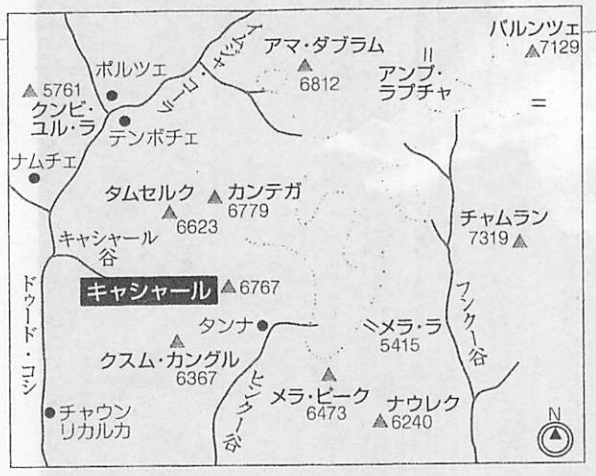
大丈夫だ。何とかやれる。もちろんたっぷり時間はかかるだろうが、この手の悪い雪のクライミングは、これまで何度も経験してきて鍛えられているはずだ。今こそ、その力を出す時だ。明日のクライミングは2人に託して今日は出し切る。改めてこの山を登り切る覚悟を決めた。

出会い

縁とは不思議なものだ。当初は全く別の山に別のメンバーと行く予定だったのがキャンセルとなってしまった。非常に残念だったが、ぼくとしては代案を考える楽しみができた。

ぼくはその時、パタゴニアにいた。辛うじてフィッツロイのノースピラーを登ったに過ぎなかったが、世界中からたくさんのクライマーが集まるパタゴニアで受けた刺激は大きかった。一方でフィッツロイ山群では、いわゆる冒険的な要素を感じることができなかった。表現は適切でないかもしれないが、どちらかというともっと手軽だけど、発想次第ではとても挑戦的で夢のあるラインを描くことができる、何度も行ってみたいと思わせてくれるエリアだ。結論は出ないまま、贅沢な悩みを抱えて帰国した。

自分は何がやりたいか。考える時間はあまりなかったが、やはりパタゴニアでは感じることができなかっ



た登山がしたかった。つまりもっと未知であること。誰も登っていないこと。そして山が大きく山頂が遠いこと。

結論を保留してもらっていた馬目に連絡し、やはりヒマラヤに行きたいと申し出た。この時点では、具体的にどこに行くのかは決まっていなかったが、青木が加わることが決まり、3人で気になる山を挙げて議論した結果、馬目が以前から目をつけていたキャシャール（ピーク43、6767㍍）南ピラーの初登攀を目指すことになった。この時点で4月に入っており、準備をするには十分な時間がなかったが、とにかく20代（青木）、30代（花谷）、40代（馬目）のだんご三兄弟のようなチームが完成し、ひとつの夢に向かって動き出すことになった。

ネパール・ヒマラヤ方面での登山は、ぼくにとって今回が8回目となるが、これまでになくコンパクトな規模になった。ルクラで雇用したポーターはたった5名。ベースは食事、ベッド共にロッジを利用することにより、同行するネパール人スタッフは1名のみとなった。これほど身軽にヒマラヤに行けるとは、恥ずかしながら、これまで考えもしなかった。反面、これまでのヒマラヤ遠征のような賑やかさはなく、ちょっと寂しい感じもした。

4日間のキャラバンは順調そのものだった。3日目にキャシャールをこの目で初めて見ることができた。惚れぼれするピラミッド。こんなに目立ってカッコいい山のど真ん中のラインが、まだ登られずに残っていたとは。この出会いには感謝せずにはいられなかった。長く未解禁だったこの山がオープンになったのは2000年。03年に西稜から初登頂された（今回我々が下降したルートだ）。南ピラーは過去数回トライされていたが、いずれも6000㍍付近で断念していて未登だった。

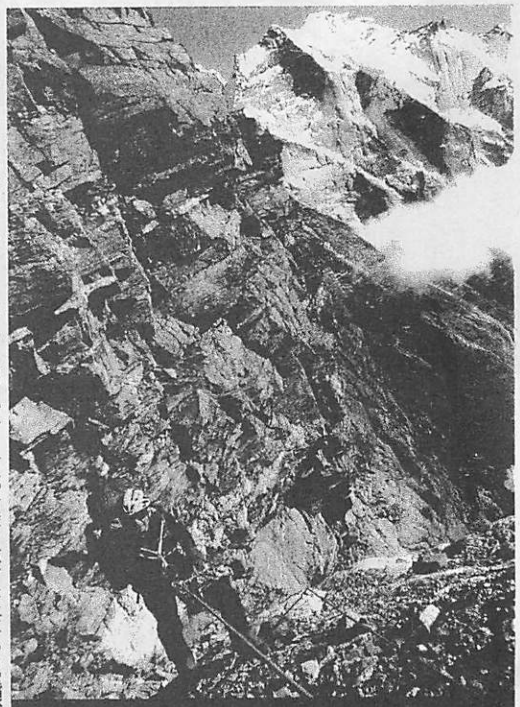
順応と偵察

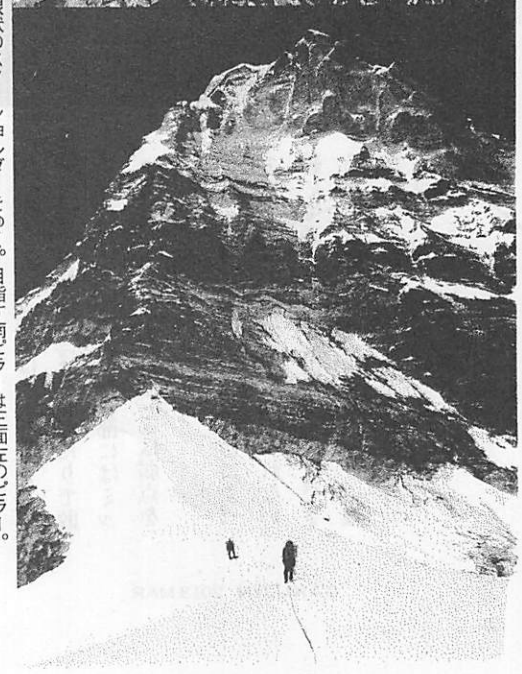
ベースを置くタンナ（4300㍍）では、我々におあつらえ向きの宿を確保することができた。滞在期間中、食事は全てロッジで注文することを前提に一泊600ルピーで大部屋を貸切りとする。3人で使うには広すぎるスペースで、ベースを空ける時も気兼ねなく荷物を広げっぱなしにしておくことができた。

男3人がひとつの部屋に籠る様はまるで合宿だ。でも個人的にはこの空間はゴキゲンだった。宿の主人夫婦はとっても親切なシェルパ族の人たちで、毎日毎食心のこもった美味しい食事を提供してくれた。外見は小さくて古い建物だったが、このベースでは我が家のようにくつろぐことができた。

宿には前年春の英国隊が残していったキャシャールの写真があって、そこに何本かのラインが引かれていた。この山についてはかなり調べたつもりでいたが、何本か知らないラインが入っていた。しかしどれも途中で終わっていて、やはり2003年の西稜以外に頂上まで抜けた記録はないようだ。

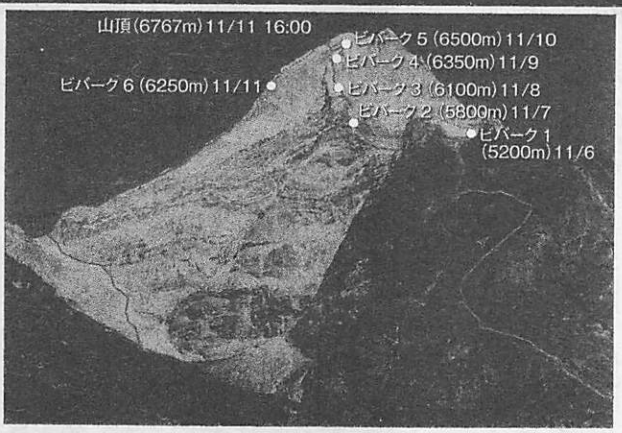
宿の主人は、今回は偵察に留めておいたほうがいいのではないかと丁寧にアドバイスしてくれた。残念ながらこちらは一度で決める気満々だ。





上・登山初日、下部岩壁をユマーリングする馬目。下・下部岩壁を抜けた上にある尾根状のスノーショルダーをゆく。目指す南ピラーは正面左のピラー。

ベースキャンプのタンナ付近から仰ぎ見るキャシャール。



高所順応するために、10月24日から近くのメラ・ピーク（6473㍍）に出かけたが、青木がハイキャンプで不調を訴えたので、いったんタンナに下山。回復を待つ間、馬目と花谷で下部岩壁の偵察と試登を行った。

麓からの偵察には高倍率のスコープを用い、かなり細かい部分まで観察することができた。その結果、南西壁側（南ピラーの左側）は落石が頻発していて、とても登れそうな状況ではないことが分かった。南東面は一見良さそうだったが、上部の緩傾斜帯の水平距離が長く時間がかかりそうな気配。最後に2010年に英国隊が登ったラインを試登した結果、4900㍍付近まであっという間に登ることができたことから、今回のコンディションには最良のラインであると判断した。2回目の順応では無事にメラ・ピークの頂上を踏むことができた。これでキャシャールにトライする準備が整った。

このルートを登るには、ある程度時間がかかるだろうとは、出発前から予想していた。そして実際この目で見て、予想は確信へと変わった。

下部岩壁の標高差はベースから900㍍ほど。ここは途中で水を得ることができそうなポイントがないので、一番スピードが上がりそうなラインを1日で抜ける必要があった。しかしプラトーを挟んだ上部岩壁は様相が一変し、まずはボロボロな岩場がおよそ300㍍。ここはスピードを上げたくても上げにくい区間だ。それにルート・ファインディングも慎重にしなければならない。この岩場を抜けると標高は約6000㍍。過去のトライはほぼこのあたりで敗退している。そこから上部にはミックス壁が出てくるが、ここは弱点をつなげて行けそうだ。

そこを抜けると雪稜。場合によっては一番厄介なパートかもしれない。続いて頂上直下の岩壁。ここもできる限り弱点をつないで抜けたい。最後にはオンサイトで下る西稜が待っ

ている。軽量・速攻は通用しないと判断した。必要な日数は1週間。これだけの時間はどうしても必要になるだろう。そのためにはある程度荷物が重くなることは受け入れなければならない。

キャシャール登攀

初日は朝3時に起床。宿の主人が密かに仕入れておいた日本の米を炊いてくれた。腹いっぱい平らげて4時半ごろ出発。2時間ほどかけてゆっくりと岩場の取付まで歩く。絶対にここを戻らない、いつになく強い意志で誓う。ここを下るということは、どこかで敗退して戻ってくるということだから。

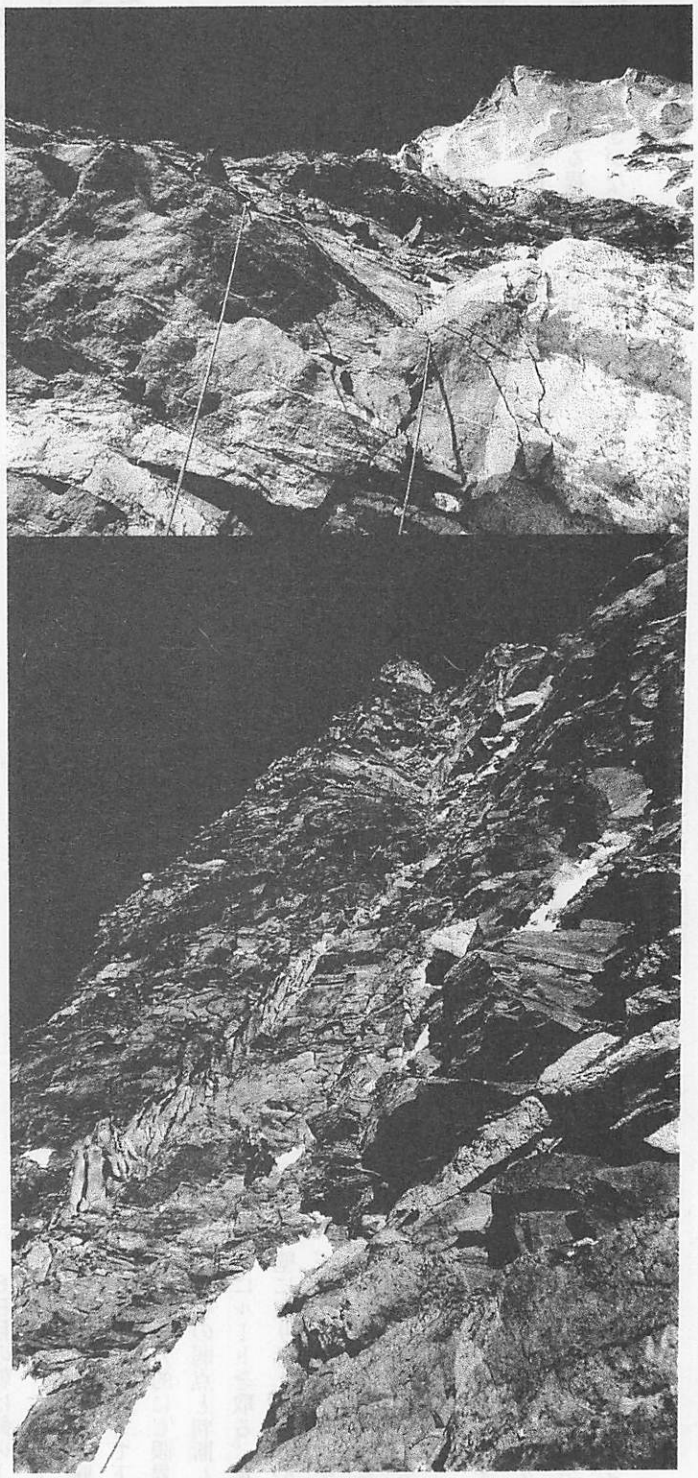
下部岩壁の標高差およそ700㍍は今日中にこなさなければならない。終日花谷がトップで登る。1週間分の食糧・燃料を詰め込んだザックを背負ってユマーリングする2人のことを考えると、少しでも楽なルートで登らなければと思う。ラインは明瞭だが、岩に付着した土やコケが多くて不快な部分もあった。

中間部の大きなバンドまでは緩傾斜のクライミング、上部にかけてはやや傾斜が増して岩が脆くなってきたが、日暮れ前に予定のビバークポイントに到着。ラッキーなことに、水も確保できた。夕日に照らされたメラ・ピークが美しい。どこまでも続く雲海に心癒される。ユマーリングで疲れたという馬目に対して、「いい運動だった」と振り返る青木。若さって素晴らしい。

2日目も若干脆い岩場を3ピッチ登ると中間部のプラトーにつながる懸垂氷河に出た。長い雪稜をダラダラと歩き、上部岩壁を5ピッチ登ってビバーク。ここで標高およそ5800㍍。ベースからすでに1400㍍登った計算になるが、明らかにここからが勝負と言わんばかりの上部の様相だ。重荷が体力をジワリジワリと奪っていくが、まだまだ元気。

気が休まることがほとんどなかった3日目。赤色の岩壁帯。脆くて急峻で、この部分の突破はこの登山を成功させる重要なパートであった。この日のトップは馬目に託す。雪がほとんど無い岩場が続くため、トップはクライミングシューズで登る。積み木を重ねたような岩場が続いた。核心部のかぶり気味のクラックだけが硬い岩で、「クライミングはこうでなくちゃ！」という馬目の歓喜の声が響く。この傾斜でのユマーリングは地獄そのものだったが……。

そこからはまた積み木に戻る。馬目はロープが岩をはねるのを嫌い、終始最低限のランナーでジリジリ延ばして行った。しかし岩場が尽きるころ、ついに恐れていた事態が起こってしまった。気温の上昇のせいか、上部からの自然落石が青木を直撃。頬のあたりにヒットした落石の痕は



上・スノーショルダーの終了点から本格的な登攀がはじまった。
下・3日目。一部をのぞいて非常に脆く急な岩場が続いた。